

マリアナ諸島の先住民チャモロに対する スペインによる初期カトリック宣教

The Early Spanish Missionaries for the *Chamorro* ;
the Indigenous People of the Marianas

高山 勝

Masaru Takayama

キーワード

チャモロ、異文化接触、イエズス会、マリアナ諸島、宣教、サン・ヴィトレス

KEY WORDS

Chamorro, Cross-cultural Contact, Jesuit, Marianas, Mission, San Vitores

要旨

マリアナ諸島は太平洋島嶼において、最も早くヨーロッパ人との接触、ならびに、キリスト教宣教の経験を持つ。スペインによって行われた宣教は先住民チャモロの伝統文化の多くを否定し、遂には先住民の殺戮という結果を招いた。これは、宣教の業が単に「福音」を伝えるだけに留まらず、先住民を「文明化」するための「統治」にまで及んだ結果である。

また、当時の宣教は「洗礼」を授けることが第一の目的とされ、武力を持ってしても、先住民を「救い」に導くことが試みられた。これらの行為は「永遠の命」を得るためには「身体の死」は厭わないという「来世的な救済観」に起因している。正典をファンダメンタルに、つまり、字義通りに理解することによって生まれた教義や信仰に基づいて行われた宣教は、イエスの世界宣教命令に込められた意図とは懸け離れた結果を残すこととなったのである。このようなファンダメンタリズムと宗教の関係は、多元的な価値観が混在する今日においては、より重要性を増す課題であると言える。

SUMMARY

The indigenous people of the Marianas, the *Chamorro*, were the first group of people with whom European colonists and missionaries came in contact in the Pacific region. The first missionaries from Spain systematically suppressed the *Chamorro* culture, culminating in a violent massacre. This was the result of the missionary motivation of “spreading the Gospel” but also of the eagerness to “control and civilize” them.

The primary aim of the mission was to baptize the people even by force in order to attain “the salvation of their souls”. This method was justified by the thought that the eternal life gained through salvation was worth even giving up one’s physical body, and by an eschatological concept held by these missionaries. The missionary work based upon the dogma and faith rooted in the literal interpretation of the Scripture led to a result totally opposed to what Jesus commanded in his Great Commission.

This historical phenomenon of a relationship between a fundamentalist concept of faith and the function of religion is a relevant issue for today’s world where distinct diversities of culture and values are prevalent.

はじめに

<問題の所在>

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16:15)

このイエスの弟子たちに対する世界宣教命令に基づいて、15世紀に始まった「大航海時代」以降、多くの宣教師たちはヨーロッパから海を越え、南米や太平洋島嶼¹に渡って、そこに住む先住民に「福音」を宣べ伝えた。宣教を歴史的に見れば、先住民の社会・文化に大きな影響を及ぼして来た。そして、その功罪は共に多大であったと言わざるを得ない。それは、宣教が単に「福音を宣べ伝える」ことに留まらず、先住民の「統治」にまで及んだためである。

<目的>

当時、ヨーロッパとは異なった伝統・文化を持つ先住民に対し、宣教師たちはどのような宣教を試みたのか。その宣教に対して先住民はどのように対処したのか。本稿は、これらの問いに対して、17世紀におけるマリアナ諸島²の先住民チャモロに対してスペインが行った初期のカトリック宣教を歴史的に概観することによって、現代にも共通するキリスト教と異文化の関係についての課題を考察するものである。さらに、

これによって現代の宣教 / 伝道のあり方を問うものである。

本稿でマリアナ諸島を研究対象とした理由は、当地域が太平洋島嶼で最も早く (1) ヨーロッパ人との接触 (1521 年、マゼラン来島)、(2) キリスト教宣教 (1592 年、フランシスコ会宣教 / 1668 年、イエズス会宣教)、(3) 外国による統治 (1695 年 - 1898 年、スペイン統治) の経験を持つからである。

<マリアナ諸島の先住民チャモロ>

現在からおよそ 4000 年前、つまり、紀元前 2000 年頃にはミクロネシアのほとんどの島々は無人島であったが、その後、東南アジアから熟練した航海術と農業知識を有していた人々が海を渡って来て、そこに定住するようになったとされている。彼らのうち、マリアナ諸島に拡散してきた人々のことを「チャモロ」と呼んでいる。³

人類学者は、マリアナ諸島、東南アジア、インドネシア、フィリピン共和国の人々との間に身体的、文化的類似を見ることができることを理由に、古代のチャモロが東南アジア出身だったとしている。文化的類似点とは (1) 言語、(2) 農作物、(3) 工芸品、(4) 習慣、の 4 項目である。古代のチャモロがマリアナ諸島まで到達した理由については、いかなる歴史資料も存在しないが、人口過剰、食物の不足、外部との衝突、冒険心、自然災害からの逃避などのうちの幾つかの組み合わせによってマリアナ諸島への「最初の移住者」は旅してきたものと推測されている。⁴

第 1 章 ヨーロッパとの接触

1. 時代背景

11 世紀から 13 世紀までの 2 世紀に亘って「聖地エルサレムの奪還」と「イスラム教徒の包囲を突破すること」を目的として十字軍が繰り返し派遣されたが、その成果を収めることはできなかった。この結果、キリスト教はイスラム勢力によってその後もヨーロッパに封じ込められ、世界宣教の機会を「新大陸の発見」まで待つこととなる。一方、イスラム勢力は西はアフリカの西岸から東はインドネシアに及ぶ広大な地域に拡大していったのである。⁵

このような状況下にあって 1415 年、ポルトガル国王ジョアン 1 世の命を受け、王の第 5 子エンリケはイスラム勢力下にあったアフリカ北端の都市セウタを攻略した。彼はここでイスラム勢力がアフリカとインドを結ぶ海上貿易航路を確保していることを知り、これを機にポルトガルも未知のアフリカ西岸に進出し、「黄金の国」と「東方の香料」を確保する航路を求めて度々、船団を派遣した。また、ポルトガルはイスラム勢力と対抗するため、伝説的なキリスト教徒の王プレステ・ジョアン⁶ が興したとさ

れるイスラム圏内に孤立したキリスト教国との接触を求め、アフリカ西岸地域に使節を派遣した。その後、スペインにおいても1492年に同国におけるイスラム教の最後の拠点であるグラナダが陥落し、徐々にキリスト教勢力の巻き返しが図られた。同年、スペインのイザベル女王の派遣したコロンブス（クリストーバル・コロン）が「新大陸を発見した」のである。その翌年、スペインは「新大陸」における領有権を確保するためにローマ教皇アレクサンデル6世に働きかけ、「(大西洋上にある)アゾレス諸島より西100リーガ⁷(約560キロメートル)に位置する経線以西の地域はすべてスペイン領である」と教書に規定させた。これに対してポルトガルが反発したため、翌1494年、改めて二国間で協議を行い、「(同じく大西洋上にある)ヴェルデ岬諸島の西370リーガ(約2000キロメートル)に位置する経線より西がスペイン領、東がポルトガル領である」と条約(「トルデシャス条約」)によって定められた。⁸

15世紀、このようにして「大航海時代」が幕開けし、その後もヨーロッパ、とくにスペインおよびポルトガルの海外進出は目覚ましいものであったことは周知の事実である。その目的は「香料などの東方からの品々をイスラム勢力の仲介なしに購入できるよう、新たな航路を発見すること」並びに「植民地の建設」であったが、1519年、東方への新たな航路を開拓すべく、ポルトガル人フェルナンド・マゼランはスペインの援助を受け、世界一周の航海に出発したのである。彼がその航海の途上、マリアナ諸島に偶然たどり着いたのは1521年であったが、太平洋島嶼に関する最古の歴史文献はこの時に記された。⁹

それでは、太平洋島嶼における先住民とヨーロッパ人の最初の接触、つまり西欧と非西欧という初めての異民族、異文化交流の様子は果してどのようなものであったのだろうか。以下はマゼランのマリアナ諸島「発見」に至る経過、並びに、その時の状況を考察するものである。

2. フェルナンド・マゼラン¹⁰

フェルナンド・マゼランは1480年頃、北ポルトガルに生まれた。貴族の出身であった彼は、幼少の頃から宮廷に仕え、ジョアン2世の王妃レオノールの侍者となった。その後、彼はポルトガルが「東方からの香料を独自に確保する」ためにイスラム勢力を攻略する艦隊の一員として、1505年、東アフリカ海岸の都市に、1511年にはマラッカに派遣されている。また、同年、彼のいとこフランシスコ・セーラーンがモルッカ地方探検隊に加わったことも相俟って、マゼランは「香料の宝庫モルッカ諸島」¹¹に非常に興味を持つようになった。そして、彼はセーラーンの体験談を基に「モルッカへは東側からの航路を発見すれば、最も容易に到達できるであろう」と考えるようになった。¹²

マゼランはこれを実現すべく新たな航海の計画をポルトガル国王に提示し、援助を

求めたが、却下された。その後、彼はスペインに移り住み、彼の計画はハブスブルク家出身のスペイン王カルロス1世（同時に、神聖ローマ帝国皇帝カルル5世）によって承認された。そして、モルッカ諸島のマルーコ島の香料を求めて、彼を提督とする艦隊（総員237名、5隻）が編成されたのであるが、その間にも、ポルトガル側から数々の妨害行為を受けた。1519年8月10日、艦隊はセビリアを出帆し、マゼランや各船の船長たちと合流するためにサン・ルスカに停泊した。ここで航海に備え、最後の準備をするために暫く滞在したのであるが、その間、彼らは毎日、近くのパラメーダ寺院に行き、ミサに出席している。そこで、マゼランは「出帆までに全乗組員が告解を済ませよう」に命じ、また、如何なる婦人も船に乗り込むことを厳禁した。同年9月20日、彼らはこの港から出帆し、長途に亘る航海が始まった。¹³

彼らは西回りでインドを目指して同年12月には南米東岸に到着し、その後、東岸を南下した。翌年の11月にはマゼラン海峡を抜け太平洋に到達したが、その間の難破や暴動・逃亡により2隻の船を失っている。彼らは太平洋に関する正確な知識もなく、乗組員はその航海に関する具体的な計画について知らされていなかったため、食料や水が不足し、その後100日近い航海の間、壊血病と飢餓によって多数の犠牲者を出した。その中には南米でスペイン人によって捕えられた先住民も数名含まれていた。¹⁴

彼らはこのような危機的な状況にあっても「神と聖母」に感謝を捧げることを忘れることはなかった。そして、偶然にもマリアナ諸島を「発見」したのであるが、そこで、先住民チャモロとヨーロッパ人との歴史的な最初の接触がなされたのである。その時の状況を「ヨーロッパ人（アントニオ・ピガフエッタ）による記録」と「チャモロの祭りにおける寸劇」の2つのテキストによって検証することにする。

（1）アントニオ・ピガフエッタの記録¹⁵

マゼランの世界一周については主に8種類の記録が残されているが、その中で「最も描写が網羅的で、内容が偏っていない」と言われているのが、イタリア人アントニオ・ピガフエッタの記録である。その一部を以下に紹介する。

1521年3月6日水曜日、東経146度、北緯12度において北西方向に小さな島を1つ、南西方向に別の2つの島を発見した。その内の1つは別の2つの島よりも高く大きな島である。提督は大きな島に停泊し、新鮮な食物を手に入れようと思ったが、その島民が我々の船に乗り込んで来ては、手当たり次第に何でも盗んでしまうために、それは実現できなかった。我々は自衛することすらできず、上陸するために帆を降ろそうとしたところ、先住民たちは我々から旗艦の船尾に繋いであった小さなボートを非常に器用に奪ってしまった。

これに激怒した提督は40人の武装した者と共に上陸し、4、50軒の家を多くの舟と共に

に焼き討ちし、住民7人を殺害した。我々は小さなボートを取り戻すとすぐに、予定通りの航海をするべく出発した。

彼らは銘々が自己の意のまま、自分勝手に暮らしている。それは彼らが如何なる「領主」も持たないからである。彼らは貧しいが、利口で盗癖がある。それで、我々はこれらの3つの島々を「ロードス(泥棒)諸島」¹⁶と呼ぶことにした。これらの泥棒たちは彼らがやっていることから察すると、自分たち以外に他の人間はこの世には存在していないと考えているように窺えた。¹⁷

(2) チャモロの祭りにおける寸劇

当時、チャモロは文字を持たなかった。文字を持つようになるのは、後に、宣教師によってアルファベットが伝えられ、彼らの言葉を書き留めるようになってからのことである。

従って、当時の様子についてはチャモロの側からの記録を知る手掛かりがないために、現在、「グアム発見の日」に持たれる祭りにおいて彼らが演じる寸劇を紹介する。それはマゼランが上陸したとされるウマタック湾で行われる次のようなものである。¹⁸

浜辺にある村では、チャモロの女性たちが首長の前で音楽に合わせて伝統的な踊りを披露している。そして、女性たちが食事の準備をしていると、突然、沖合いに大きな船が姿を現し、チャモロの男たちは身構える。すると、船から小舟に乗り移ったマゼランとその部下たちが浜に上陸して来る。チャモロの女性たちは、彼らに水や食料を提供し、首長は彼らを村に迎え入れる。その時、沖合いの船上では、チャモロの男たちが船の備品に興味を示し、これらを持ち帰ろうとする。これに気が付いたマゼランたちは首長を剣で切り付け、多くの男たちを殺害する。そして、村に火を放ち、藁葺きの小屋は次々と焼け落ちる。マゼランたちは小舟で船に引き揚げ、浜にはチャモロの男たちの遺体が累々と残され、その回りでは女性たちが悲嘆に暮れる。そして、悲しみの歌だけが浜辺に響き渡る。¹⁹

このようにロードス(マリアナ)諸島を後にしたマゼラン艦隊は、3月16日に同諸島から300リーガ(約1700キロメートル)離れたところで陸地(この島の名前はザマル²⁰)を発見した。翌日、提督は「水の補給と休息のためには、この島の右に位置する無人島の方がより安全である」と判断し、その島に上陸した。3月18日、先住民が小舟で彼らを訪問し、友好的な交流を持ったということが記録されている。²¹

4月7日、艦隊はフィリピン諸島のセブ島に到着する。そこで、マゼランはセブ島のフマンボ王の一家と約500人の住民に洗礼を授けている。マゼランは4月27日にセブ島に隣接する小島マクタン島でラブラブ王に戦闘で敗れ、戦死する。艦隊は提督のほ

か多くの乗組員を失ったため、1隻を廃棄し、残る2隻が11月にモルッカ諸島のディードール島に到着した。12月には残る2隻のうち1隻を島に残し、ヴィクトリア号1隻だけで帰途に着いた。喜望峯周りでスペインに向かったヴィクトリア号の乗組員は、その後も「壊血病と飢餓」に悩まされ、また、ポルトガル船に拘束されるなど、多くを失った。翌年9月にスペインに帰り着いた者の数は、僅かに18名であった。マゼラン艦隊はこのような多大な犠牲を払ったが、僅か85トンのヴィクトリア号が持ち帰った香料によって得た売却益は、その投資額を大きく上回るものであった。また、このようなマゼランによる最初の世界周航の意義は、スペインにとって「『西回り』で香料諸島に至る航路を開拓した点」にあるが、一方、「アジアから新大陸に戻る『東回り』の航路の発見」という課題を残した。²²次に、この課題に対するスペインのその後の取り組みとマリアナ諸島との関わりについて考察する。

3. ロペス・デ・レガスピ²³

マゼラン来訪の5年後、1526年9月4日、フライ・ガルシア・ジョー・デ・ロアイザがスペイン船でマリアナ諸島に立ち寄って「西回り」で太平洋横断を果たしたが、その際に11人のチャモロ人を捕虜として連れ去っている。この39年後、つまり、マゼラン来訪の44年後の1565年にスペイン人ミカエル・ロペス・デ・レガスピはメキシコを出帆し、フィリピンに向う途上、マリアナ諸島に寄港している。そこで、彼はチャモロの意志とは無関係に、その地のスペイン領有を一方的に宣言するのである。²⁴

太平洋の「東航」に最初に成功したのは、この時にレガスピと同行していたアンドレス・デ・ウルダネタである。彼はマリアナ諸島を経由した後、フィリピンに到着し、セブ島に「東洋における最初のスペイン人町」を築いた。その後、彼は帰途に就くべく、北緯42度まで北上して偏西風をとらえ、太平洋を「東回り」で横断してメキシコに戻った。1571年にレガスピはフィリピンのルソン島にマニラ市を建設し、その後、18世紀末まで、マニラとアカプルコを結ぶ航路は「ガレオン船貿易ルート」²⁵と呼ばれ、スペインにとって重要な役割を果たした。²⁶

レガスピはグアムに寄港した当時の様子を次のように書き留めている。

1565年1月21日、我々は陸地の見える所までたどり着いた。それはグア（Gua）と呼ばれるロードス諸島の一つであるということが後でわかった。我々が船の舳先をその島に向け、島までもう2リーガ（約11キロメートル）というところで、50ないし60隻のブラウス（三角帆が備えられた先住民のカヌー）が艦隊を取り巻いた。彼らに紙を与えたところ、彼らはそれに最も興味を示し、米と紙を交換することとなった。

そして、彼らは再び紙を取りに、今度は交換するものを持たずに忍び込んできた。彼

らはスペイン人よりも遅い体格をしており、投石器を使って攻撃を加えてきた。

その後、我々の若い水兵がインディオに殺害されるという事件が発生した。彼は体になくとも30の槍で刺された跡があった。私はこの件で土着民を罰するために行動することを指揮官に申し出た。深夜、部下を招集して彼らの何人かを殺し、多くの者に傷を負わせ、海岸に沿って建つ多くの家をすべて燃やした。そして、約2ポンドの非常に良い硫黄を見つけ、土着民を一人生き捕りにし、祖国スペインに連れて行くこととした。とにかく、この島は住民の気質から「ロードス(泥棒)」と呼ばれるにふさわしい島であった。この島に到着してから11日を過ごし、我々は次の目的地に向けて出帆した。²⁷

このような記録に対してチャモロの人々は「何故、一団のチャモロがレガスビの部下に石を投げつけたのか。また、何故、若い水兵を殺したのかについて、その原因や理由は記されていない」と反論している。²⁸

グアムを出航した後、フィリピンに到着したレガスビは、その地においてもスペインの領有を宣言した。そして、次のような優先事項についての一覧をセブ島から本国に送付している。²⁹

1. フィリピンを兵隊や貿易商にとって安全な所とするには、植民地とする際に「宣教師」が最も必要である。
2. 「軍隊や武力」は二の次である。しかし、キリスト教の真理に抵抗する先住民に対しては、武力によって「真理」に至らせられるかも知れない。何故なら、教会も「広場や路地に出て行って人々を連れてきなさい」というキリストの言葉によって先住民を殺すことを正当化しようとしているからである。ただ、キリストを弁護するとすれば、彼は決して「宗教」の名のもとに何人も殺すことはなかったのである。しかし、僕(教会や宣教師たち)は主人(キリスト)よりも偉くはないのである。
3. イスラム教徒を隷属させ、彼らの領土を取り上げる権利、そして、彼らを奴隷として買い取るこの権利が我々に委任されるべきである。つまり、彼らが「福音宣教」を妨害する場合は、彼らから領土を取り上げると共に、彼らを奴隷とすることさえ正当化されるべきである。

第2章 スペインによる初期のカトリック宣教

マゼランが世界一周の航海中にマリアナ諸島を発見したのは1521年であったが、奇しくも、メキシコ最後の土着文明「アステカ王国」がスペインによって滅ぼされたのもこの

年である。³⁰

また、後に「イエズス会の創立者」となるイグナティウス・デ・ロヨラがスペイン・パンブローナの地方貴族の生活を捨てて回心をしたのも1521年である。³¹

この年を挟んで1517年には「ルターによる宗教改革」、1534年には「イエズス会の結成」がなされたのであるが、この時代にカトリックが「プロテスタントによって奪われた失地」を回復するために新天地を求めて太平洋地域に進出を始めたのである。³²

1565年にレガスピが領有を宣言したフィリピンでは、マリアナ諸島に先駆けてカトリックの宣教が「植民地化と不可分」に行われた。1572年頃までは、一般に「植民地化」が「宣教」に先立って行われたが、それ以降、フィリピンにおけるスペインの支配を確固たるものとするために大きな役割を果たしたのは、次の5つの「修道士会」である。最初に来島したのは、レガスピの遠征隊と共に来たアウグスティノ会であった。続いて、フランシスコ会(1578年)、イエズス会(1581年)、ドミニコ会(1587年)、そして、リコレクト会(1606年)が来島した。これらの様々な修道士会の来島に伴って、1595年、スペイン国王フェリーペ2世は、フィリピンを幾つかの教区に分割し、それぞれの修道士会の宣教地域を明確にした。³³

この時代、マリアナ諸島での最初の宣教は1592年にフランシスコ会によって試みられたが、継続性がなく失敗に終わった。その後、この地域の宣教に大きな影響を及ぼしたのがイエズス会であった。この章では、まず、先住民に対する当時の「イエズス会の宣教論」について考察し、次に、マリアナ諸島の先住民に対して行われた「カトリック宣教の実態」を明らかにしたい。

1. 先住民に対するイエズス会の宣教論

当時の先住民に対するイエズス会の宣教論を知る手掛かりとして、ホセ・デ・アコスタの『インディアス布教論』³⁴を取り上げることとする。この書は、1572年、アコスタがイエズス会のペルー管区長として赴任した際に、その地域の先住民に対する「宣教を妨げる根本的な原因」を考察し、キリスト教宣教の「理論とその実践のための手引書」として1576年末に書き上げられた。1582年、トリビオ・デ・モグレベホ大司教によって開催された第3回リマ公会議において、この宣教論は採択され、その後の先住民に対するイエズス会の宣教活動に大きな影響を与えた。それまでに行ってきたスペインによるカトリック宣教は、「先住民に福音を伝え、キリスト教信仰に導き、彼らに救霊の扉を開くという霊的な世話」に留らず、「彼らの生活から『野蛮』と『邪悪』を根絶やしにし、神の被造物たるにふさわしい理性ある『文明生活』に導くという統治にまで踏み込んだもの」であった。当初、スペイン人がカリブ地域における先住民の「文明度」を図る尺度にしたのは、彼らが「カスティージャのキリスト教農夫

のように生活できるか」ということであった。カトリック信者であるスペイン人にしてみれば、「ヨーロッパ・キリスト教世界の生活は誰もが自然に送ることができる」と考えていたのである。ところが、「カリブ地域の先住民は文明生活を持たないばかりか、彼らだけでは文明生活を築く能力にも欠ける」と判断されたのである。³⁵

以上の問題に関して、アコスタは『インディアス布教論』の中で次のように述べている。

(1) 進駐の必要性

<福音をインディオ³⁶に宣べ伝えるために必要となる進駐について>

インディオはその気性から見れば、人間と獣とが混ざり合った観があり、その習慣から見れば、人間というよりも人間の姿をした化け物といった観がある。このため、彼らと接するには、時には人間として優しく扱い、また、教えるべき時は厳しく、暴力を用いてでも教えることが必要である。このように接して行く内に、彼らは獣にも似た生来の気性を捨て、徐々に従順になり、規律を身に付け、人間らしくなるであろう。³⁷

(2) 武力による宣教の是非

<インディオが如何に頑迷であろうとも不信仰を理由にして戦争を行うことは正当ではない>

簡潔に、断定的に言えば「不信仰は戦争を行うための正当な理由にはならない」ということである。何故なら、不信仰を裁き、罰するのはただ神のみだからである。

では、彼ら不信者に対して我々はどのようにすべきであろうか。マタイには次のように書かれている。「あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい」(マタイ 10:14)と。主は彼らに向かって剣を抜きなさいとか、彼らに槍を投げなさいとは言われなかった。³⁸

<不信仰者への戦争は如何なる場合に正当となるか>

もし、インディオが何らかの狼藉を我々に企てるならば、我々エスパーニャ人として、自己防衛のため身の安全を図ることは正当である。そして、また、受けた損害の弁償を彼らに求め、受けた侮辱に報復を行い、必要とあらば、断固たる行動を起こし、戦争によって彼らの権利を取り上げることも正当である。

しかし、ここでとくに気を付けるべきことは、受けた損害に対する報復をインディオに行う場合、他の人間に対して行う場合と同じようにすべきでないということである。何故なら、インディオは知力に乏しく、子供並みであるため、子供や子女として、否、むしろ家畜に対するように扱うべきである。インディオに過酷なまでに報復するという

より、処罰は畏敬の念を抱かせるに必要な程度に留めるべきである。彼らに剣を突き付けるより、むしろ鞭打ちの刑で彼らを威嚇し、彼らが畏れ、服従するように教えるべきである。問答無用とばかり残虐に走り、彼らの集落を焼き払い、彼らを殺害し、終身奴隷やその他の戦争の悲惨な結果を負わせるべきではない。³⁹

この他にも、アコスタは「インディオの習慣でキリスト教に抵触しないものは保護しなければならぬ」など、宣教に際しての具体的、実践的な方針をこの書で明らかにし、同書の序文においては、「インディオの豊を如何にして救済するか、その方法を正確かつ的確に述べることはとても難しい。何故なら、これらのインディオの国があまりに多い上、それぞれの気候や土地柄、それに衣服のあり方から知力の程度や習慣・伝統に至るまで何もかも大きく異なっているからである。」とも記している。そこで、彼はインディオを3つの階層に大別して、これらの階層に応じた宣教論を次のように展開している。

第1の階層は「安定した政治の仕組み、公法、防備された町、見識ある役人、隆盛で秩序ある商業を持ち、加えて最も重要なことは文字を十分に操る人々」である。具体的には、第1に中国人、次に日本人、そして、東方インディアスの国々における人々である。彼らは確かに野蛮な面があり、自然法から懸け離れてはいるが、理性的な人間らしい生活を送っているので、「かつて使徒たちがギリシャ人やローマ人を福音に導く際に用いた方法」で宣教することが可能である。彼らを強引に「力と権力」で強制することは、宣教にとって逆効果である。

第2の階層は「文字の使用や成文法、それに哲学や学芸といったものは知らないものの、裁判官や政治の仕組みを有し、政治を行うために人々が集う所定の場所を持ち、組織された軍隊を整え、それなりに威厳ある宗教儀礼が行われ、人間としての規律を守っている人々」である。この階層に属するのはペルー人など新大陸に住むインディオたちである。彼らは町に定住し、個人の権利を認めているが、彼らの習慣・法律には人に危害を加えるような欠陥があり、より大きな「力と権威」によって対処しなければ、「福音を受け入れ、人としての品位ある生活を送ること」はできない。しかし、自然法や福音に反しない限り、彼らの法律、財産、その自由使用権は尊重しなければならない。

第3番目の階層は「人としての情感を持ち合わない、獣にも似た未開人」つまり「法律を持たず、王を戴かず、条約を結ばず、役所もなければ、確固とした統治制度もなく、住処を絶えず変え、獣が棲む洞窟や家畜小屋のような所に住む人々」である。モルッカ諸島など東方のインディアスの島々にいる人間がこの階層に属する。このような「人間というか半人間」には、「人としての生活」ができるよう教育することが肝

要である。これに対して、彼らが強硬に反抗するならば、「力」によって宣教に対する妨害を排除しなければならない。このことに関しては、アリストテレスは「獣を狩猟するように捕え、力で手なずけることができる」と説き、また、聖書にも「主人は言った『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいしてくれ。』」(ルカ 14:23)と記されてある。⁴⁰

以上、アコスタによる『インディアス布教論』を概観すると、当時のヨーロッパ人の先住民に対する認識を窺い知ることができる。ところで、マリアナ諸島の先住民チャモロは、彼が分類した3つの階層において第3の階層に属するものと思われるが、このような宣教論に基づいて、マリアナ諸島においては実際にどのような宣教が行われたのであろうか。このことを次に考察することとする。

2. サン・ヴィトレスによる宣教

スペインは、マゼラン以降も度々、太平洋地域への進出を試みたが、「ローマ教皇庁がポルトガルとの世界二分割支配承認の条件としていた異教徒改宗事業」には着手しなかった。これに対して、教皇庁は「新世界」への宣教活動の遅れに焦燥し、1622年、宣教を「各宣教師依存から教皇庁直轄」に切り替えた。これに対して、フランスでは「パリ外国宣教協会(Paris Foreign Missions Society)」⁴¹(1660年)、イギリスでも「キリスト教知識普及協会(Society for Promoting Christian Knowledge)」(1698年)、「英国教会福音宣布協会(Society for the Propagation of the Gospel)」⁴²(1701年)が設立された。このような状況下において1668年にディエゴ・ルイス・デ・サンヴィレトス以下、数名のイエズス会士がマリアナ諸島で宣教を開始したのである。⁴³

現在、グアムにおいてチャモロの人口の9割以上がカトリック信者であるが、その基礎を築いたのがサン・ヴィトレスである。彼はマリアナ諸島において4年間の宣教活動の後、殉教の死を遂げるのであるが、1985年に彼はローマ法王ヨハネ・パウロ2世によって聖人としての祝福を得ることになった。これを得るためにグアムのカトリック教会は法王庁に20年間も働きかけてきたのであるが、一方で、チャモロの中には、「彼の功績がチャモロにとって有益なものであったのか」または「彼がスペイン統治の先兵としての役割を担った者に過ぎなかったのではないか」という疑念を抱いている者も少なくない。ある者は「サン・ヴィトレスは残忍な戦争とチャモロの大量殺戮の遺産を象徴する」と言い、ある者は「彼は本当にチャモロを愛し、実際に外敵から我々を守ろうとした」と信じている。このようにサン・ヴィトレスに対する評価はチャモロ政治史の中心を成している問題である。⁴⁴

このような相反する彼の評価の基にどのような宣教の歴史が隠されているのであろうか。彼は如何なる人物で、どのような宣教をマリアナ諸島で行ったのか。また、彼の宣

教に対して先住民チャモロは如何に対処したのか。以下では、これらの課題を明らかにすることによって当時のスペインによるカトリック宣教の実態を知る手掛かりとする。

(1) ディエゴ・ルイス・デ・サン・ヴィトレス⁴⁵

ディエゴ・ルイス・デ・サン・ヴィトレスは1627年11月12日、スペイン、ブルゴース地方に生まれた。彼はスペイン王フェリーペ4世の宮廷に仕える貴族の息子で、1640年、およそ13歳の時にイエズス会士となった。彼の両親は当時の社会状況から「軍人になる方が得策である」と判断し、息子ディエゴが宗教に興味を持ち続けることを思い留ませようとした。しかし、1651年、彼は聖職者に定められ、両親もこれを認めるようになった。

最初の5年間、彼はスペインの田舎に住む人々のために仕えた。1657年、彼は「私は神からの召命を果たすために、許されるなら、とくにノンクリスチャンの中で自分の命も体も神に捧げることを神に約束する」という誓いを立てた。この誓願を果たすため1659年、サン・ヴィトレスは上司であるゴスヴィノ・ニッケルに海外派遣のために次のような上申書を提出した。⁴⁶

<ゴスヴィノ・ニッケル神父への手紙(抜粋) 1659年7月2日、サン・ヴィトレス>

私は少年時代から今日に至るまでの何年もの間、「異教徒の魂が主に帰依すること」を何よりも切に望んできた。異教徒の魂をキリストに導くこと、そして、その目的のために私の血を流すという生来の願望は、日々高まっている。失われゆく、より多くの魂の救いとキリストの名のために私が血を流すという願いが実現することを私は切に願う。殉教者としての勝利を得るために、私は何よりも宣教を望む。私は、どんな労苦も、死さえも恐れない。キリストのため、神や隣人に対する深い愛のため、また、私ができるであろう1つの魂のために、私は生命もおしくはないし、その最も美しい死(殉教)さえも厭わない。故に、私がもし、少なくともフィリピンで働いている人々の数に加えられることによって、日本や中国のために少しでも役に立つことができるなら、また、このフィリピンでの特別な宣教のために神から機会が与えられるなら、私は私自身を父なる神にお献げするつもりだ。⁴⁷

ニッケルはこのサン・ヴィトレスの請願に応え、彼をフィリピンのマニラヘイエズス会宣教師として派遣することを決定した。

当時、スペインからフィリピンへ向かうには、スペインから先ずメキシコに渡り、貿易風を利用して太平洋を西回りでフィリピンへ帆船で航海するという「ガレオン船貿易航路」⁴⁸が唯一の手段であった。1660年5月14日、サン・ヴィトレスはスペインを出帆し、メキシコに向かったが、そこで彼は2年間滞在することになる。メキシ

コ・フィリピン間は、1年に1度だけガレオン船が航行していたが、船にはフィリピンで購入する香料などの代価としてメキシコ・アカプルコで船積みされた金や銀などの物資が満載されるため、向こう2年間は聖職者が利用できるスペースがなかったからである。そして、1662年4月5日、遂にサン・ヴィトレスは他のイエズス会士と共にサン・ダミアン号でメキシコからフィリピンに向けて、太平洋を渡る航海が実現したのである。

メキシコ・フィリピン間を航行するすべてのスペイン船と同様、物資を補給するため、彼らの船もマリアナ諸島の1つ、グアム島のウマタック (Umatac) 湾に寄港した。この短い停泊がサン・ヴィトレスの人生におけるターニング・ポイントとなった。何十年もの間、スペインのガレオン船が補給港としてグアムを利用していたにもかかわらず、スペイン人の永住者がこの島には誰一人いなかったため、先住民の霊的な必要を満たす聖職者は全くいなかったのである。サン・ヴィトレスはガレオン船を囲んだブラウス (三角帆を備えたカヌー) に先住民チャモロを見かけた。その時、彼は「神から与えられた自分の人生における使命は、これらの先住民をクリスチャンに改宗させることである」という確信を神からの啓示によって得たのである。彼は当時の心境を父に宛てた手紙で次のように記している。⁴⁹

<父への手紙 (抜粋) 1663年7月18日、サン・ヴィトレス>

ロードス (マリアナ) 諸島と呼ばれる島に我々が到着する前に、洋上でそこに住む先住民たちを見て、私は非常に憐れみの念を抱いた。彼らはココナッツや新鮮な果実と鉄を交換しようと、我々のガレオン船に近づいて来た。彼らは穏やかで従順な良い気質を持つ人々に見えた。我々の経験からすると、このような純真な先住民たちは、良き指導のもとにさえいれば、より良い教育を受けたヨーロッパ人たちよりも良きクリスチャン生活を送るものである。

彼らは普段、純真であるが、「待つ」ということができないようだ。彼らが我々の船にやって来て取引をしようとする時は、狡猾となる。このことが彼らを「ロードス (泥棒)」と呼ばる由縁であろう。

これらロードス諸島には、金もなければ、他の物質的な価値のある物は何も無いからと言って、主からの奉仕を受けるにはふさわしくないということにはならない。⁵⁰

1663年7月、彼はフィリピンに到着すると同時に、マリアナ諸島での宣教の許可⁵¹が得られるよう彼の上司とマニラの知事に請願を始めた。上司に宛てた上申書は次のような内容であった。

<マリアナ諸島宣教のための上申書 (抜粋) 1663年7月22日、サン・ヴィトレス>

毎年、ロードス (マリアナ) 諸島を出航し、ニュー・スペイン (メキシコ) へ戻って

行くすべての船舶は、そこに住む先住民たちのそばをただ通り過ぎていくばかりである。その船には、数名のスペイン人や少数の聖職者が乗っていたとしても、この地の宣教を目的とした者は未だ誰一人としていない。少なくとも、この地を主のために「征服」しようとした教団は未だかつてない。このような「征服」は他のどのようなヨーロッパ文明化された地域よりも我々の主によって喜ばれるであろう。そこには多くの魂があらかじめ備えられているからである。

もし、この地にマホメットの一派（イスラム教）がすでに浸透していたとしても、我々は失望してはならない。なぜなら、その一派が太平洋の島々を侵略していても、主の恩寵や聖職者の熱意によって追い払われているからである。少なくとも、ロードス諸島にはまだ彼らは入って来てはいない。その前に我々が宣教の機会を失ってしまうと、これらの失われいく魂が改宗することは、より困難となるであろう。それは誠に遺憾なことである。

洗礼の恩恵によって「死にゆく子供たち」を収穫することは崇高なことである。聖フランシスコ・ハビエル⁵²は常に洗礼、とくに成人に対する洗礼を何よりも重んじられていた。また、師は「このような島々では洗礼がほとんどなされたことがない」ともおっしゃっていた。⁵³

しかし、このようなサン・ヴィトレスの請願に対してサルセド知事はそのような地域の宣教からは何らの意義も見い出すことはできないとその要求を拒絶した。

ところで、17世紀においてスペイン、オーストリア、およびフランスは世界を支配することのできる有力な国々であり、それぞれが他国に対して優位を手に入れるために互いに競っていた。これら列強の国家間では世界の序列を保持し、好敵手を超える利点を得るために様々な外交上の同盟が確立された。スペインにおいては、国王フェリーペ4世（彼自身オーストリアのハプスブルク家の出身であった）が44歳の時、彼の姪である14歳のマリアーナと再婚したのである。

このような状況において、サン・ヴィトレスは彼の実の父を介してフェリーペ4世とその妻マリアーナ王妃にマリアナ諸島への宣教を直訴した。1665年にフェリーペ4世はこれに賛同し、その航海のために船を建造する勅令を發布した。交易上の利得だけがスペインを「新世界探訪」に仕向ける唯一の原動力ではなかった。これと等しく重要な役割を果たしたのが「宗教」であった。当時、「魂をキリストに捧げなければ、王や王妃でさえも天国に入ることはできない」と信じられていたため、サン・ヴィトレスはこのような点を巧みに利用して王の賛同を得ることに成功したのである。

1667年8月7日、サン・ヴィトレスは新造船で、アカプルコに向けてフィリピンを出港した。当時、フィリピンから東に位置するマリアナ諸島へは東から吹く貿易風が

逆風となるため、一旦、北上して西風を利用してアカプルコに渡り、その後、貿易風を利用して太平洋を西回りでマリアナ諸島に向かうという航路⁵⁴を取らざるを得なかったためである。

その後、フェリーペ王は死去するのであるが、王妃はサン・ヴィトレスに対して宣教のサポートを続けた。1668年3月23日、ようやく彼はアカプルコからマリアナ諸島に向けて出港することができたのである。その際、彼と共に数人のイエズス会の聖職者とその補助者、そして、32人の守備隊がフィリピンへの派遣のために乗船した。守備隊は宣教を保護する役割を課せられていたのであった。⁵⁵

(2) マリアナ諸島での宣教

1668年6月15日、サン・ヴィトレスとその一行は、アカプルコを出帆して89日かけて遂にマリアナ諸島のグアム島の沖合に到着した。午後になると、すぐに多くの先住民チャモロのセーリング・カヌーが船を取り巻いた。彼らはナイフや鉄と交換するために、ココナッツ、バナナなどの果物を持ってやって来た。

翌日の午後、フィリピン宣教の責任者であるルイス・デ・メディナ神父と彼の通訳が上陸した。人間の脛の骨によって作られた槍で武装した200人以上のチャモロが海岸で整列をして彼らを迎えた。彼らはアガナ(Agana)の首長であるクプハ(Quipuha)の従者であるが、2人の「外国人」を暖かく迎えた。メディナはクプハに鉄を贈り、通訳を通してスペインの聖職者が「永遠の救いに至る道」をチャモロに伝えるために来たことを説明した。彼のメッセージを受けてクプハはメディナと数人の者を自分の家に招き、一夜を過ごすことを薦めた。

サン・ヴィトレスは多くの先住民を船に迎え入れ、(彼はフィリピンで暮らしていた2年間にチャモロ語を学んでいた)彼らにすぐさま「宗教」を教え始めることができた。彼はその日の内に、船上に飾り付けられた祭壇の前でチャモロに最初の洗礼を授けたのである。

翌日、クプハと食事を共にしたサン・ヴィトレスは何百人もの先住民に洗礼を授け、12人に幼児洗礼を施した。彼が最初の2日間の宣教で多くの収穫を得たので、フィリピンに向かう予定であった他の宣教師とその助手たちも、サン・ヴィトレスと共にグアムに残ることとなった。サン・ヴィトレスはこの島の先住民がマゼランによって名付けられた「ロードス(泥棒)諸島」という当時のスペイン名に反して、信頼に値する慈悲深い者であると考えた。そして、彼が行った最初の公的な仕事は、金銭的、精神的な援助を行ってくれたマリアーナ王妃に対して、感謝の意を込めて、これらの島々を王妃の名前に改名したことである。今日、これらの島々が「マリアナ諸島」として知られることになった由縁である。

多くの先住民は最初、サン・ヴィトレスとその一行を歓迎した。最初の数日におけ

る成功は、今後の宣教に大いに期待を抱かせるものであった。しかし、カトリックの教義や教えに反する伝統や生活習慣を持つ先住民の反発に直面するまでには、そんなに時間はかからなかった。最初の論争の焦点は「誰が洗礼を受けるに相応しいか」ということであった。当時、島には明確な階級制(カースト)⁵⁶があり、洗礼という「神聖な儀式」を下級のカーストの者が受けることに対してチャモロの間で強い異論が出た。

また、チャモロが「グマ・ウリタオ (*guma' uritao*)」(スペイン人は「偉大な家」と呼んでいた建物で、独身男性たちが若い女性を招いて性的関係を持つ習慣を、宣教師たちは「男性の性的武勇を高めることが目的である」と見なし、これを禁じた。⁵⁷

しかし、古代のチャモロ社会においては、確かなガイドラインや決まり事を守ってさえいれば、このような性的な活動も許されていたのである。また、このことが「グマ・ウリタオ」の主な目的ではなかった。そこはチャモロにとって「若い頃の教養を身に付けるための訓練の場」であり、重要な「教育機関」でもあった。そこは主として、少年の教育と訓練の中心であり、若い男女がどのようにすれば一族や村が良くなるかについて互いに対話する場でもあった。しかし、宣教師にとってそれは「罪の家」以外の何物でもなかったのである。

宣教師は「グマ・ウリタオ」を非難したばかりでなく、先祖の魂を崇拝することを強く非難し、埋葬の仕方についても変えるように要求した。彼らは「先祖の霊を信じることは間違っており、彼らの霊を崇めることは悪いことである」とチャモロに主張したが、これをチャモロは簡単に受け入れることはできなかった。彼らの多くはクリスチャンになった後でさえ、自分たちの信仰を放棄することを拒絶した。

チャモロは、先祖の霊である「アニティ (*aniti*)」が死んだ後もその地に留まると信じていた。彼らは先祖の霊がいつも近くに居られるように頭蓋骨をバスケットに入れ、家の軒に吊るし、遺体を家の傍に埋めた。それはチャモロが彼らの一族の土地が神聖だと信じており、彼らにとって土地は社会的、経済的な価値があると同時に霊的な価値を有していたからである。しかし、宣教師たちはこの考えを退け、洗礼を受けたチャモロは神聖な墓地に埋葬されるべきであると主張した。この要求は一族の土地こそが神聖であると考えていたチャモロを怒らせる結果となった。敬愛している家族を他の土地に葬るということは、彼らには考えも付かないことであった。

また、「マカーナ(呪術師)」と「カカーナ(女魔術師)」の力に対するチャモロの信仰は、先祖崇拝と深く関わっていたために、宣教師からとくに強く非難された。チャモロは「マカーナ」と「カカーナ」が神通力を持ち、御利益や復讐の目的のために魔法を使うことができると信じていた。彼らは「アニティ」を呼び起こして、病気を治したり、また、これを引き起こしたり、雨を降らしたり、干ばつをもたらしたり、捕獲や収穫に影響を与え、競争や争いの結果にも影響を及ぼすと信じられていたのであ

る。しかし、宣教師は彼らが魔法使いや魔女であり、彼らの行為や儀式を悪魔の働きであると考えた。

1648年の船の難破以来、この島に住んでいて先住民に影響力があるチャコという中国人男性は「洗礼の水に毒が入っている」という噂を広めた。しばしば、聖職者たちが死に近づいている人たちに洗礼を授けていたので、多くの人々はこのことを進んで信じた。このような考え方は伝統的な呪術師「マカーナ」によっても支持され、人々に広められた。これに対して宣教師たちは「彼らこそ悪魔に操られているのだ」と主張した。⁵⁸

これらの問題は両者の緊張を高める要因となった。1668年6月に宣教師がマリアナ諸島に上陸して以来2ヶ月も経たない内に、テニアン島で一人の神父が先住民に襲われ負傷し、また、その5日後には、彼の仲間2人が殺された。その後、グアムではメディナ神父がバゴ湾の近くの村で先住民の団によって襲われた。このような状況下においてもサン・ヴィトレスはグアムを中心にマリアナ諸島において宣教を続けた。その結果、1668年末までにマリアナ諸島において7,000人以上⁵⁹の洗礼者があったことをディエゴ神父は記録している。

しかし、翌1669年にテニアン島では先住民同士の戦争が勃発し、サン・ヴィトレスはその仲裁を試みるが、彼は両者から敵対され、グアムに援軍を求めた。彼はスペイン守備隊の団と共にテニアン島に戻り、2ヶ月間に及ぶ戦闘の末、争いは鎮圧された。

1670年1月27日、サイパン島でメディナ神父が先住民の待ち伏せに遭い、彼はマリアナ諸島で殉教した最初の神父となった。彼は4,000人以上の島民をカトリック信仰に導いたとされている。これに対してサン・ヴィトレスと新しく任命されたスペイン人知事は直ちに援軍を要請し、1671年6月には援軍がグアムに到着した。その後も武力に守られた宣教が継続されたのである。

その時の模様について、サン・ヴィトレスは知人のカルデノッソ神父に宛てた手紙の中で次のように記述している。⁶⁰

<カルデノッソ神父への手紙(抜粋) 1671年11月4日、サン・ヴィトレス>

ここグアムの海岸や浜辺では、彼らは我々の武器に対して木製のバリケードをめくらしている。しかし、主は我々が傷つけられたりすることがないように彼らから守ってください。わずか20名ほどの守備隊によって我々は守られている。しかし、確かに我々はこの戦いに際し、主や聖ミカエル、そして、我々の特別な守護聖人が配置して下さった多くの天使たちによって支えられている。

あの中国人チャコは、今までにも彼らに様々な影響を及ぼしてきたように、今度は、まるで頭蓋骨や悪魔の印を彼らにかぶせるかのようにバリケードの造り方まで彼らに教

えている。

神父たちは、助手と共に仕事を互いに助け合っている。彼らは非常に熱意を持って、また、神に対する喜びを持って目的のためにこの地での不快感や食料・睡眠の不足に堪えながら、(この世の報酬は不足としているが)天における報酬を得ている。神の愛、そして、これらの貧しく無知な人々、その子供たち 彼らも確かに天の父と母の息子たちであるのだが に対する愛のためにすべてを堪えている。⁶¹

1672年3月31日、グアムでは若いメキシコ人のカトリック信者が、シナハナ(Sinajana)村近くで先住民に殺害され、同日、宣教に関わった別の4人も殺された。その知らせを聞き、サン・ヴィトレスは仲裁のために若いフィリピン人助手に導かれてアガナに向かった。

1672年4月2日、サン・ヴィトレスはトゥモン村を通り過ぎそうとした時、首長マタパン(Matapang)の妻に最近、女の子が産まれたということを知り、首長の家に立ち寄ってその子の洗礼を申し入れた。マタパン自身は洗礼を受けていたにもかかわらず、これを拒否し、威嚇した。しかし、サン・ヴィトレスは彼の留守中、娘に幼児洗礼を強行した。マタパンはこれを知って彼の仲間のヒラオ(Hirao)と共にサン・ヴィトレスとその助手を殺害したのである。

これを契機として、20年以上に及ぶチャモロとスペインの全面戦争に突入することになる。チャモロ・スペイン戦争の結果、スペイン人によって持ち込まれた天然痘の影響と相俟ってチャモロの人口は推定で5万人から5千人に激減したといわれ、現在では純粹のチャモロ民族は存在しない。これはその後のスペイン統治時代の政策として、フィリピン人を中心とした多数の移民がグアムに送り込まれ、チャモロとこれら移民との混血が進んだためである。⁶²

考 察

1. マリアナ諸島における初期カトリック宣教の特徴とその問題点

16世紀、スペインはアジアにおけるイスラム勢力の中心地であったマカオに対抗して、フィリピン・ルソン島にマニラ市を建設した。その時、すでにスペインは、金・銀が豊富に産出される南米ペルーを統治していたのであるが、17世紀に入ってその金・銀を原資として香料や東南アジアの産物を買付けするため、メキシコ・アカプルコとフィリピン・マニラを結ぶガレオン船航路を確保した。このように、南米ペルー、メキシコ、そして、フィリピンはスペインにとって当時、重要な植民地となり、その

地の治安維持や交易上の利益の確保などを目的とした政治的な意図に基づいて、「武力の保護」のもとにカトリック宣教がなされたのである。

当時、そのガレオン船航路の重要な中継地となったのが、マリアナ諸島であった。しかし、マリアナ諸島はインドネシアのモルッカ諸島のように香料を産出することも、また、南米ペルーのように金・銀の鉱石を採掘することもできなかったために、スペインは島全体を植民地として統治することはなかった。従って、この地は南米やフィリピンと異なり、国家による政治的な意図に基づく組織的な宣教を行う対象とはなり得なかったのである。

その地の宣教は、フィリピンにイエズス会宣教師として赴任するために、たまたま、そこに立ち寄ったサン・ヴィトレスの個人的なミッションによって、「先住民の魂の救済」を目的として始まったのである。では、何故、先住民に「福音」を伝えるために始まった宣教が「先住民の殺戮」という結果を招いたのであるか。サン・ヴィトレスは最後に、彼自らが「軍隊の派遣」を要請している。彼が宣教に対する先住民の抵抗を武力によって排除してまでも、つまり、彼らの意思に反しても宣教をなそうとしたのは何故か。彼が自らの生命を懸けても伝えようとしたものは何だったのか。

< 来世的救済観 >

それはサン・ヴィトレスが殉教を遂げた場面からも窺い知ることができる。首長マタパンの意に反しても、彼の生まれただけの娘に「洗礼」を授けることが「唯一、絶対の救いに至る道」である、と彼は確信していたのである。また、彼がマリアナ諸島宣教のために上司に宛てた書簡の内容からも、彼は何にも増して「洗礼」を重んじていたということが推測できる。そして、「永遠の生命」を得るためには、自らの、また、先住民たちの「身体の死」は厭わないという「来世的な救済」に彼の宣教・信仰の核心があったのだと思われる。彼は彼の上司や知人に宛てて綴った手紙の中で、先住民への宣教に懸ける思いを「異教徒の魂を救済するためには、自分の血を流すこと（殉教）」さえも厭わないと重ねて述べている。

ラテン教会の伝統においては、『救い』はアウグスティヌス以来の原罪論の影響を受け、まずは『原罪からの解放』であり、恩恵論、秘蹟論によって具体的には『洗礼』によってのみ可能であった。⁶³ また、キリスト教教義においても、確かに、洗礼は教会によって執行される sacrament のうち最も重要なものであり、それは「永遠の生命」を得ること、つまり「唯一、絶対の救い」に至らせる道に導く鍵でもある。しかし、この「福音」を伝えるために行われた宣教が先住民に及ぼした影響は、本稿で掲げたように功罪とも多大であったということは否めない。

< 貧しく無知な人々 >

また、彼はカルデノツソ神父に宛てた手紙の中で、先住民のことを「これらの貧しく

無知な人々」と表現している。つまり、「彼らは何が『救い』であるかさえ、自らの判断では思い知ることができない」と彼は判断していたのであろう。このことはアコスタが記した『インディアス布教論』⁶⁴にも次のように記されている。インディオで第3番目の階層に属する者、つまり、「人としての情感を持ち合わせない、獣にも似た未開人」には「獣を狩猟するように捕え、力で手なずけることができる。」

<武力の行使と宣教、そして統治>

一方で、アコスタは宣教を受け入れない者に対する宣教者の取るべき態度は、本来、「あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようとしもない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。」(マタイ10:14)という姿勢にあると言っている。そして、宣教に際して「自衛」のための戦争はやむを得ないが、「処罰」は畏敬の念を抱かせるに必要な程度に留めるべきだとも述べている。しかし、グアムにおいても南米ペルーと同様にこのことが遵守されることはなかった。その後も、太平洋島嶼においては先住民を「文明化」するために武力による「統治」を伴った宣教が、植民地化と相俟って行われたのである。

2. これからの宣教 / 伝道の課題

当時の宣教の特徴は(1)洗礼を最も重んじたこと(2)宣教者の殉教や被宣教者の肉体的な死は厭わなかったことであった。これらは「来世的救済観」に起因しており、その背景には「永遠の生命」という聖書の鍵語理解が大きく関わっていた。

<神学的意味>

新約聖書において「永遠の生命」ということばは「“現世的な”生命のはかなさに左右されない、より“根源的な”生命」を意味するギリシャ語をその語源とし、「“来世”において神が正しい人を死者の中から復活させ、永遠の生命を与える」という思想を生み出した。殉教者たちはこの思想を固く信じて、“現世”に執着することなく進んで死を迎えた。しかし、「永遠の生命」は神学的意味において「イエスの死と復活にあずかる者には“来世”ではなく、“今”与えられるもの」である。また、福音書によれば、その源は愛であり、愛は「他者の存在を肯定するもの」である。⁶⁵このような理解の上に立てば、来世的な救済に偏重することなく、「貧しく無知な人々(先住民)」に対する宣教は、違った結果を生み出したかも知れない。

<ファンダメンタリズム>

当時の宣教論は武力による統治を伴った宣教に対して、聖書の一節「通りや小道に出て行き、“無理にでも”人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。」(ルカ14:23)から自己肯定的な根拠を導き出した。このように、聖典をファンダメンタルに、つまり、字義通りに理解することによって生まれた教義や信仰に基づいて行われた宣

教は、イエスの意図とは懸け離れた「先住民の殺戮」という結果を残すこととなった。

今日、ユダヤ・キリスト教的 / 欧米的価値観の枠の中に異なる文化を持つ人々を閉じ込めてしまうという同化政策は通用しない。神学の分野においても、宗教多元的な潮流を無視することはできず、様々な角度から伝統的なキリスト教的価値観が見直されつつある。「文明の衝突」が指摘されている今日、「新世界」に対して宣教が行われていた当時とは時代背景や思想的なバックボーンは異なるが、宗教は「ファンダメンタリズム」⁶⁶ といかに向き合うかということが大きな課題となっている。つまり、それぞれの宗教の聖典 - 我々にとっての聖書 - の教えを多元的な価値観が混在する現代社会において、いかに理解(解釈)し、これを「忠実」に実行し得るかという問題である。その課題の一つとして、すべての宣教・伝道の基となるイエスの世界宣教命令「全世界に行き、すべて造られたものに福音を述べ伝えなさい。」(マルコ 16:15)に対して 21 世紀を迎えた今、改めて、我々はいかに応えるべきかが問われているのではないだろうか。

注

- 1 「太平洋島嶼」とはオセアニア地域のうちオーストラリア大陸を除くメラネシア、ポリネシア、ミクロネシアに属する島々のことをいう。
- 2 マリアナ諸島はミクロネシア西部に位置し、15の島々によって構成される。そのうちの最大の島がグアムである。
- 3 Anne Hattori, “ Before the Chamorro-Spanish Wars,” *Hale-ta I ; Ma Gubet-na Guam*, (The Political Status Education Coordinating Commission, 1994), 2.
- 4 Lawrence J. Cunningham, “ The Ancient Chamorros of Guam,” Lee D.Carter, William L.Wuerch and Rosa Roberto Carter ed. *Guam History: Perspectives*, (Micronesian Area Research Center, 1997), I, 14, 15.
- 5 泉靖一「大航海時代直前の世界」、飯塚浩二・井沢 実・泉靖一・岩生成一・増田義郎・箭内健次編『大航海時代叢書 別巻 - 大航海時代』(岩波書店、1965) p.120.
- 6 「彼は 12 世紀頃、西ヨーロッパで流布した伝説の人物で、アルメニア、ペルシャ以東の異教徒地域にあって、キリスト教徒の指導者として君臨したと言われる王である。全くの空想の人物ではなく、東ないし中央アジアのネストリウス派の部族長で聖職者を称えていた者である。その話がヨーロッパに伝えられ、当時東方世界からの圧力に悩んでいたキリスト教徒たちによって栄光化され、誇大化されたものと思われる。その後、彼の国の位置がアフリカだと思われるようになった。」；増田義郎「補注」、林屋永吉、野々山ミナコ、長南実、増田義郎編『大航海時代叢書 I - コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン 航海の記録』(岩波書店、1965) p.686 参照。

- 7 1リーガ (league) = 約 5.6 キロメートル。
- 8 増田義郎「総説」、『大航海時代叢書 I』 pp.9-13 ; Joaquin Flores Sablan, *My Mental Odyssey* (Stinson Press, 1990), p.251.
- 9 ピーター・ベルウッド (植木武、服部研二訳)『太平洋 - 東南アジアとオセアニアの人類史』(法政大学出版局、1989年) p.2.
- 10 フェルナンド・マゼラン (Fernando Magellan) は英語読み。本来の名はフェルナン・デ・マガリャンイス (Fernaο de Magalhaes) である。
- 11 モルッカ諸島はインドネシアに位置し、テルテナ島、ティドール島、ハルマヘラ島、マルーコ島等によって構成される。
- 12 長南実「マガリャンイス 最初の世界一周航海」、『大航海時代叢書 I』、p.481。
- 13 同上 pp.484-493。
- 14 同上 pp.522-524。
- 15 アントニオ・ピガフェッタ (Antonio Pigafetta) については正確な記録があまり残されていない。「おそらく 1491 年頃、北イタリア、ヴィチエンツァの小貴族の家に生まれたと思われる。1519 年頃、ローマ教皇の使者フランチェスコ・キエレガトの侍者となり、カルロス皇帝の許しを得、この航海に参加し、幸運な 18 人の生還者の一人として帰国した。」長南実「マガリャンイス 最初の世界一周航海」、p.484.参照。
- 16 las Islas de los Lodrones, 後に「マリアナ諸島」と改名される。
- 17 Emma Helen Blair, James Alexander Robertson and Edward Gaylord Bourne, *The Philippine Islands 1493-1898* (A.H.Clark Co., 1903-09), Vol.33,1519-1522, 95-99.
- 18 この祭りは 1977 年以降、毎年 3 月の第 1 月曜日、祝日である「グアム発見の日 (Guam Discovery Day)」に開催されている。なお、実際にマゼランが上陸したのは、ウマタック湾よりも北、おそらく、トゥモン湾だったであろうということが、実験的航海に基づいた論文で発表されている。Dirk Anthony Ballendorf, “Whither Magellan?” *Journal of Pacific History* 参照。
- 19 寸劇 “Magellan Landing”。2000 年 3 月 6 日 (月) 午後 4:15-4:30、グアム・ウマタック湾にて。
- 20 ザマル (Samaru) 島はフィリピン諸島にあり、レイテ島の北西に位置する。
- 21 Emma Helen Blair, James Alexander Robertson and Edward Gaylord Bourne, *The Philippine Islands 1493-1898*, p.103.
- 22 斎藤尚文「『文明』との邂逅」、石川栄吉編『民族の世界史 14 オセアニア世界の伝統と変貌』(山川出版社、1992) pp.233, 234.
- 23 Miguel Lopez de Legazpi
- 24 Anne Hattori, “Before the Chamorro-Spanish Wars,” p.14.
- 25 「ガレオン船貿易ルート」とは、マニラを出航するガレオン船は 6 月または 7 月に偏西風を利用して北緯 40 度辺りまで北上して太平洋を東航し、3000 マイル (約 4800 キロメートル) 近い航海の後、11 月または 12 月にアカプルコに着く。アカプルコを出航するガレオン船は通常 3 月または 4 月に貿易風を利用して

- 北緯15度当りの太平洋を西航し、5月または6月にマリアナ諸島を経由して、その後、1,2週間でマニラに到着する。Robert F. Rogers, *Destiny's Island : A History of Guam*, (University of Hawaii Press, 1995), p.17 参照。
- 26 斎藤尚文、「『文明』との邂逅」, pp.234,235。
- 27 Emma Helen Blair, James Alexander Robertson, Edward Gaylord Bourne, *The Philippine Islands 1493-1898* (A.H. Clark Co., 1903-09), Vol.2-1521-1509, 197-200.
- 28 Anne Hattori, “Before the Chamorro-Spanish Wars,” p.14.
- 29 Joaguin Flores Sablan, *My Mental Odyssey*, p.255.
- 30 ジャック・スーステル(荻野千秋訳)『アステカ文明』(白水社、1975年) p.133。
- 31 フィリップ・レクリヴァン(鈴木宣明監修、垂水洋子訳)『イエズス会』(創元社、1996年) p.17。
- 32 1540年、教皇パウロ3世、イエズス会を認可。同上 p.174 参照。
- 33 ヴァレンティノ・シトイ2世(寺田勇文訳)「フィリピンのキリスト教」; ヴァレンティノ・シトイ2世、フリドリッヒ・ウクル、サアド・チャイワン、ゾウ・モウ編『アジア・キリスト教史2 - フィリピン・インドネシア・タイ・ビルマ - 』(教文館、1985) p.17。
- 34 ホセ・デ・アコスタ(Jose de Acosta)によると、「インディアス」とは当初、ヨーロッパとアフリカの彼方にある陸地のすべてを意味していたが、時間の経過と共に、「東方のインディアス(インド)」と「西方のインディアス(新世界)」に分けて呼ばれるようになった。ここでは、後者を「インディアス」と呼んで、東方のインディアスと区別している。ホセ・デ・アコスタ(青木康征訳)『世界布教をめざして』(岩波書店、1992) p.301 参照。
- 35 同上 pp.301-313。
- 36 ここでいう「インディオ」とは、一般に「西方のインディアス(新世界)」に住む先住民のことを指す。
- 37 ホセ・デ・アコスタ、『世界布教をめざして』, pp.144-147。
- 38 同上 pp.94-96。
- 39 同上 pp.154-156。
- 40 同上 pp.3-12。
- 41 これは「ローマ・カトリック教会の東アジアへの宣教活動機関」である。『世界キリスト教百科事典』(教文館、1986) p.61 参照。
- 42 これらは「ローマ・カトリック教会以外で最初に設立された宣教協会であり、英国教会内に組織」された。同上、参照。
- 43 北大路弘信・北大路百合子『世界現代史36 オセアニア現代史』(山川出版社、1987) pp.252, 253。
- 44 Anne Hattori, “Before the Chamorro-Spanish Wars,” p.18.
- 45 Diego Luis de San Vitores
- 46 William D. Pesch, “A History of San Vitores in Guam, 1668 to 1672,” Lee D. Carter and William L. Wuerch and Rosa Robert Carter ed. *Guam History: Perspectives*, (Micronesia Area Research Center, 1997), I, 69.

- 47 “Letter from Fr. San Vitores to Fr. Gosvino Nickel, dated Alcalá de Henares, 2 July 1659,” Rodrigue Levesque, ed. *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*, (Levesque Publication, 1995), IV, 117-126.
- 48 「ガレオン船貿易ルート」(注25)参照。
- 49 William D. Pesch, “A History of San Vitores in Guam, 1668 to 1672,” pp.69, 70.
- 50 “Letter from Fr. San Vitores to his father, dated [Taytay] 18 July 1663,” Rodrigue Levesque, ed. *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*, pp.169, 170.
- 51 当時、フィリピンは中国、日本、その他周辺諸国の宣教の拠点となっていたためにマリアナ諸島への宣教についてもその管轄下にあった。
- 52 「フランシスコ・ハビエル (Francis Xavier) はイエズス会創立時の会員。インド、マラッカ、モルッカ諸島での宣教を経て、1549年、最初の宣教師として日本を訪れた。1552年、中国で病死。1622年、聖人に加えられる。」『キリスト教人名辞典』(日本基督教団出版局、1986)参照。
- 53 “Letter from Fr.San Vitores to Fr. General, dated Taytay 22 July 1663,” Rodrigue Levesque, ed. *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*, pp.189, 190.
- 54 「ガレオン船貿易ルート」(注25)参照。
- 55 William D. Pesch, *op. cit.*, pp.70-72.
- 56 チャモロ社会は2つのカーストに分けられていたが、高いカーストを「チャモリ (*Chamorri*)」と言い、低いカーストを「マナチャン (*Manachang*)」と言う。これらの成立についてはマリアナ諸島の初期の移住者がマナチャンで、その後、彼らを征服したのがチャモリではないかと推測されている。Lawrence J. Cunningham, “The Ancient Chamorros of Guam,” pp.24, 25 参照。
- 57 William D. Pesch, “A History of San Vitores in Guam, 1668 to 1672,” pp.72, 73.
- 58 Anne Hattori, “Before the Chamorro-Spanish Wars,” pp.20, 21.
- 59 当初、1669年4月21日までの受洗者数は13,289人と報告されていたのであるが、これはグアムにおける受洗者数6,055人とマリアナス諸島全体での受洗者数7,234人を重複して計上したものであり、後に訂正されている。“Jesuit annual reports for 1668-1669” *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*, IV, 508. 参照。
- 60 William D. Pesch, “A History of San Vitores in Guam, 1668 to 1672,” pp.74, 75.
- 61 “Letter from Fr. San Vitores to Fr. Cardenoso, dated Agaña, 4 November 1671,” *History of Micronesia: A Collection of Source Documents*, ed. Rodrigue Levesque, (Levesque Publication, 1995), V, 395-399.
- 62 William D. Pesch, “A History of San Vitores in Guam, 1668 to 1672,” pp.75, 76.
- 63 岩島忠彦「唯一の福音と二つの宣教観 ザビエルが目指したもの、公会議が目指したもの」、『カトリック研究』70号(2001) p.127。
- 64 「先住民に対するイエズス会の宣教論」(本文)参照。
- 65 『新カトリック大事典』Vol.1、(研究社、1996) pp.725, 726。
- 66 ここでいう「ファンダメンタリズム (Fundamentalism)」とは1920年代にアメリカで起った、プロテス

タント教会内の保守的な神学運動を指すのではなく、一般に根本原理を忠実に遵守する思想や運動を指し、とくに、そのうちの「原典（オリジナルテキスト）回帰」の流れを指す。